16　次の文は、『栄花物語』の一節である。関白藤原道隆の息子である・隆家兄弟は、道隆の死後、法皇への不敬などの罪に問われ、播磨国・但馬国（いずれも現在の兵庫県）に流罪となった。その後伊周は、重病の母親を見舞うため秘かに播磨から京に戻ったところ、再び捕らえられて今度は筑紫（九州）まで流されることになった。これを読んで、後の問に答えよ。

〈京都大〉二〇二一年度出題

　今は筑紫におはしましつきたるに、そのをりの弐は国朝臣なり。かくと聞きて、御まうけいみじう仕うまつる。「あはれ、殿の御心の、有国を、罪もなく怠ることもなかりしに、あさましう無官にしなさせたまへりしこそ、世に心憂くいみじと思ひしに、有国が恥はが端にもあらざりけり。あはれにかたじけなく、思ひもかけぬ方にも越えおはしましたるかな公の御よりはさしまして、仕うまつらむとす」など言ひつづけ、よろづ仕うまつるを、人づてに聞かせたまふもいと恥づかしう、なべて世の中さへ憂く思さる。御消息、わが子して申させたり。「思ひがけぬ方におはしましたるに、京のこともおぼつかなく、驚きながら参るべくさぶらへども、のにてさぶらふ身なればさすがに思ひのままにえまかりありかぬになむ、今までさぶらはぬ。何ごともただ仰せごとになむ従ひ仕うまつるべき。世の中に命長くさぶらひけるは、が殿の御末に仕うまつるべきとなむ思ひたまふる」とて、さまざまの物ども、どもに数知らず参らせたれどこれにつけてもすずろはしく思されて、聞き過ぐさせたまふ。そのままにただにて過ごさせたまふ。

　かくいふほどに、神無月の二十日余りのほどに、京には母北の方うせたまひぬ。あはれに悲しう思しまどはせたまふ位の命長さ、あはれに見えたり。されどそれはむげに老いはてて、たはやすくも動かねば、た、、などいふ人々、よろづに仕うまつり、の御事ども例のさまにはあらで、桜本といふ所にてぞ、さるべき屋作りて、納めたてまつりける。あはれに悲しともおろかなり。但馬には、夜を昼にて人参りたれば、泣く泣く御衣など染めさせたまふ。筑紫にも人参りにしかど、いかでかはとみに参りつくべきにもあらず。後々の御事ども、さるべくせさせたまふ。

　筑紫の道は、今十余日といふにぞ参りつきたりける。あはれ、さればよ、よくこそ見たてまつり見えたてまつりにけれと、今ぞ思されける。御服など奉るとて、

　　そのをりに着てましものを衣やがてそれこそ別れなりけれ

とぞ独りごちたまひける。

（『栄花物語』より）

注（＊）

大弐＝九州一円を統括する大宰府の、実質的な長官にあたる職名。

有国朝臣＝藤原有国。以前、道隆に嫌われ、さしたる罪もないのに官位を剝奪されたことがあった。

故殿＝藤原道隆。

端が端にもあらざりけり＝まったく取るに足らないものであった、の意。

資業＝有国の息子。

わが殿＝有国がかつて仕えていた、藤原兼家（道隆の父、伊周の祖父）のこと。

御斎＝ここでは、慎み深い生活を送ること。

二位＝「母北の方」の父、高階成忠のこと。

明順、道順、信順＝成忠の息子たち。

後の御事ども例のさまにはあらで＝火葬にせず土葬にしたことをいう。

藤衣＝喪服。

問１　傍線部（１）（２）を、適宜ことばを補いつつ、それぞれ現代語訳せよ。

◎問２　傍線部（３）は伊周のどのような気持ちをあらわしているか、説明せよ。

問３　傍線部（４）はどういうことを言っているか、説明せよ。

問４　文中の和歌を、指示語の指すものを明らかにしつつ、現代語訳せよ。

【解答と採点基準】

問１　（１）＝Ａ朝廷のお取り決めよりはいっそう心を込めて、Ｂ私は伊周様に   
Ｃお仕え申し上げよう

Ｂの内容がなければ全体０。

Ａ＝４〔「さしまして」（さし増して）の意味が表現できていない場合は０。〕

Ｂ＝３〔人物を示す補いがない場合は０。〕

Ｃ＝３〔謙譲語の訳は「伺候しよう」も可。〕

（２）＝Ａ伊周様のもとにすぐにお伺いしなければならないと思うもののやはり Ｂ私は自分が思うとおりに動き回ることもできないので、　Ｃ今まで参上しておりません

Ａの内容がなければ全体０。

Ａ＝４〔「さすがに」が受けている内容の補いがない場合は０。〕

Ｂ＝３〔「え～ぬ」の訳がない場合は０。〕

Ｃ＝３〔謙譲語の訳は「お仕えする」「伺候する」も可。〕

問２　Ａ大した罪もないのに道隆から官職を剝奪されるという仕打ちを受けた有国が Ｂ道隆の息子である自分を恨むことなく手厚くもてなすことにつけても Ｃ流罪の身としてはかえって気が引けて居心地が悪い気持ち。

Ａ＝３〔有国が道隆から受けた出来事の説明が不明確ならば０。〕

Ｂ＝４〔有国が伊周にどのように接しているかが不明確ならば０。〕

Ｃ＝３〔「すずろはし」（＝そわそわとして落ち着かない）の意味が不明確ならば０。〕

問３　Ａ成忠が長生きをしたために Ｂ娘に先立たれてしまうという憂き目を見なければならなかったことは、Ｃしみじみと気の毒に思われたということ。

Ｂの内容に触れていなければ全体０。

Ａ＝３〔成忠が長生きをしたということが記されていなければ０。〕

Ｂ＝４〔娘に先立たれるという内容が記されていなければ０。〕

Ｃ＝３〔「気の毒だ」「かわいそうだ」などの補いがなければ０。〕

問４　Ａ秘かに京に戻り重病の母に別れを告げた時、いっそ臨終を見届けＢこの喪服を着てしまったらよかったのになあ。Ｃあの時の生前の母との別れがそのまま永遠の別れであったのだなあ。

Ａ・Ｃの指示語の指すものが記されていなければ全体０。

Ａ＝３〔京へ戻り母に会ったという内容が不明ならば０。〕

Ｂ＝３〔助動詞「まし」の訳が不適切ならば０。〕

Ｃ＝４〔「それ」の内容が記されていなければ０。〕

【現代語訳】

　まもなく（伊周様は）筑紫に行き着きなさったが、その時の（大宰府の）大弐は有国朝臣である。このように（伊周様が筑紫に到着した）と聞いて、おもてなしをたいそうし申し上げる。（有国は）「ああ、故道隆様のお考えが、（この）有国を、罪もなく過ちを犯すこともなかったのに、驚くことに官職を取り上げなさったことは、たいそうつらく情けないことは並々でないと思ったが、（そんな）有国の恥はまったく取るに足らないことだった。しみじみと畏れ多く、思いもかけない所（＝筑紫）にも（国々を）越えていらっしゃったものよ。問１（１）朝廷のお取り決めよりはいっそう心を込めて、（私は伊周様に）お仕え申し上げよう」などと言い続けて、万事お仕え申し上げるので、（伊周様は）ほかの人を通してお聞きなさるのもとても気が引けて、すべて御身の上までもわずらわしく思われる。（有国は）お手紙を、我が子の資業に命じて申し上げさせた。（その手紙には）「思いもかけない所にいらっしゃったので、京の事情もはっきりわからず、驚きながらも（すぐに）参上しなければならないことでございますけれども、（私は）九国の長官としてお仕えしております身ですので、問１（２）（伊周様のもとにすぐにお伺いしなければならないと思うものの）やはり（私は自分が）思うとおりに動き回ることもできないので、今まで参上しておりません。何事においてもただ（伊周様の）お言葉に従ってお仕えするつもりです。（私が）この世の中に命長くおりましたのは、私の主君（＝兼家）のご子孫にお仕え申し上げるためなのだろうと思い申し上げております」と言って、さまざまな物を、いくつかの櫃に数もわからないほどにさし上げたけれども、こうしたことにつけても（伊周様は）居心地が悪くお思いになって、お聞き流しになる。そのままただもう精進のお食事（など慎み深い生活の様子）でお過ごしになる。

　このように言ううちに、神無月（＝陰暦十月）の二十日過ぎの頃に、京では（伊周様の）母北の方がお亡くなりなさった。（娘の中宮定子様は）しみじみと悲しく途方に暮れていらっしゃる。（母北の方の父の）二位が長生きされたことは、しみじみと気の毒に思われた。そうであるけれどもその方は非常に老い果てて、容易に動けないので、ただ（息子の）明順、道順、信順などという人々が、万事お仕え申し上げ、弔いのことなどはいつもの（火葬の）方法ではなくて、（土葬で）桜本という所で、それにふさわしい建物を作って、納め申し上げた。しみじみと悲しいことは言葉では言い表せない。但馬には、昼夜兼行して（休む間もなく）使者が参上したので、（隆家様は）泣く泣く喪服にお着がえになる。筑紫にも使者が参上したけれども、どうしてすぐに到着申し上げようか、すぐに到着申し上げるはずがない。後々の（七日ごとの）法要は、それにふさわしく執り行いなさる。

　筑紫への道中は、（但馬よりも）さらに十日余の日を要して到着申し上げた。ああ、やはり思ったとおりだった、（京に戻った時、母に）よくお会い申し上げ（私の姿を）お見せ申し上げたことだったなあと、今さらながらお思いになる。喪服をお召しになると言って、

　問４秘かに京に戻り重病の母に別れを告げた時、いっそ臨終を見届けこの喪服を着てしまったらよかったのになあ。あの時の生前の母との別れがそのまま永遠の別れであったのだなあ。

と独り言をおっしゃった。